旅立ち

K・レイン
佐藤健治訳

I

いつも　ただ　この現在　この庭で
いつも　過去と未来のきょう　その総和[1]

終りのない　永遠なる光　花のなか
花や葉のなか　きれいな果てしない空のなか

西に傾く陽の東　新月の西
その北側に　わたしの小さな家　水仙　花開き

それでも　この広い　美しい　永遠なる所で
わたしの心をいためる　思い出や死に別れ

あなたと別れようとしているのだから　わたしの小さな世界よ
きょうもなお　黄金の光に　輝いているのに

神のひとつの顕現の　終りと始め
この現在に　すべてがあったし　すべてがあるだろう

悲しみ　旅立ち　流浪――これらは　なんだ
もの言わぬ[2]エウメニスたちよ　こんなに小鳥のさえずりやヒナギクがあるのに
わが眼から　しぶしぶ流させるの　このむだな涙を

II

「喜びなさいよ」（と　遠くの声）
「喜びなさいよ　もうおわかれなんだから
あらゆるしがらみから。これからは　のんびりできますよ
山々や　雲たちや　小鳥や木のように。
しがらみはたち切るのよ　ね　あなた　できるうちに
自分の永遠の世界に　はいるのよ」
「すると　悲しみは　どうなるの」と　わたし
「ね　おしえて　こんなに悲しいのに
ことばにもならないわ　だけど　つぎつぎに　つたえるの
母から娘へ　娘から母へと
愛は　えらばねば　くりかえし　くりかえし
消える運命のものを　地上のとるにたらぬすべてを
花びらから　羽根まで」

「あなたは　愛してきたじゃないか　ほかの庭まで　ずっと昔から
そして　すべては　ひとつの緑のヴェイルのなかに　いっしょに織りこまれ
いまでもつづく　光の流れ　大気の流れ
種から草へ　どんぐりからカシの木へ　森から火へと
まだ生まれざる人　もう亡き人も　あなたの仲間　いたるところで
いつもそうであったように　いまもなお」

「それは　ほんのつかの間の　したしみ　ね
いろんなところや　日々は　かつては　ホーム
この世の　いろいろとかくまってくれるところ
いってしまうと　心の　いちばん近いところ
顔などは　もう二度と　見られないが
それが死ではないのか　わたしたちの愛をしめ出してしまうのは」

Ⅲ

心のなかに　風が吹き

あの　とぎれぬ糸
現在から　過去へと
外から　内へと
見られるものから　見るものへ
空や庭　木や鳥
変えられたり　移されたり
記憶へ　苦痛へ
この若い葉や　このヒナギク
あのまだら風が
ちらりと目を向ける葉の
きらめく草
いまのわたしとなり
その総和はすべて
これまで　わたしのなくしたもの
が　つくりだすのも　わたし
緑から　喜びを
風から　知恵を

冷たい大地から　黄金を
黄金の太陽から
悲しみの　生き血を
そこにひびくのが　心臓
わたしの過去と
未来は　近づく
みしらぬ　日々へ

が　これらすべてのなかで　どれよりも
あかるく　したしいのは
風や　ヒナギク
小鳥のカヤクグリ
何物にも恐れず　日の光に輝き
花園(はなぞの)　もとめ
わが窓の　そと
羽根のある　時と
つねに存在し

飛びまわり　ひるがえり
この　現在に
光は　愛となり
葉は　無となり

Ⅳ

思い出の冬の森　そこへ行くことはもはやなく——
凍った湖　もの言わぬ白鳥　向こうの
あのやかたは　すべて覚えており
そこに住む人　或は　かつて住んだ人を——
わたしがちらっと見たのは　昔　はるか昔　あの場所　が今はわたしたちには　もう死んでいて
ほかの時　ほかの土地に
わたしたちは　いたかもしれないし　いるかもしれない
この世が夢想で　夢がこの世なら
二匹の黒い番犬が　見張りをし

ケーキがなだめて　あの口を閉じさせ——
望みは　どんな思い出から
しずかな大気の調べのように　あたかも——が　ここでは
夢はかえられ　ドアなどはひとつも　あの家にはなく

V

最近　ずっと　このやせた大地のなかの
心の楽園にあるのは　芽を出しかけたこれらのリンゴの木のなかで
夕方の草のなかで閉じる　これらのヒナギク
下へおろされる　目に見えない根
それを　いま　またひきさかねばならぬ
この小さな家から　もぎとらねばならぬ　そこに住む夢を

この　静かな部屋——
オークの戸棚や電灯　水仙の水差し
小さなひとふさの　ヤブイチゲ

おいていったのは　もういまはいなくなった　孫娘
このかくれた贈り物は　たんなるもうひとつの思い出の代わり
そこでは　いとしい霊魂が　さまよい
わたしたちみずからも　弱い存在となり
よくホームへやってきたのに　もう二度と　はいれず

母の安楽椅子　もの書きに使っていた父の机も
うすれたスナップ写真となり　叔母の聖書や祖父の最後の手紙
虹の絵を　友が描いた　まさにこの窓
カップやお皿　ドミノ[3]仮面やジグソーパズル
炉の前のネコの敷物や　色あせたモリスのカーティン
二度と再び　一緒になることはなく
コケや小枝など　巣をつくることもなく　が　念入りに作りあげたものの
断片を　冬の風が　まきちらす

まきの燃えるいろり　夕暮れの　晴れた
西の空　陽[ひ]が沈み　次第に暗く

そこへ　月がのぼり　一日あとのイースター[4]は
雲におおわれ　くちばしの細いシギ鳥の　シューととぶ
沼地の上　もう二度と　これを忘れることは
できそうもなく　この現在に
しかし　わたしのたよりないテーブルで　さらにもう一度書いてみる　悲しみつ
長い永遠の現在は　わたしたちにとっては　終りのない旅立ちなのだ

VI

この　わたしの最後のホームを
織りなすのは　一生の
思い出　母の
結婚の贈り物　母が
縫ってくれた　リンネルの下着
母の裁縫台に　はいっている
指ぬきや　糸のかせ

わたしがいままで生きてきたのは
母の世界のなか
母の指が触れた
いとしいものたち
お菓子の容器　台所用品
それらが　語ってくれる　母の生活
いろりやテーブルを
掃いたり　ひろげたり
夫や　子どものために
もの言わぬ　使者たち
母の愛を　託され
伝えてくれる
もはや　母はいないが
母の夢から
引き出す　ひとつひとつの手がかりは
もつれを　ほぐし
どのひと針も　ひとつの思い

衣服を着せるの　しっかりと
じぶんのひとり娘に
そのうち　いつか
それが　いまや　わたしの過去

それが　わたし
あとに残された
母の子ども
単純で　無学で
その魂の国は
このあかるい山々
この北の空

Ⅶ

ほんのひと足　踏むだけ
すれば　もう帰ることはなく

広々とした原っぱへの門から　ふりかえって　ごらん
ホームは　すでになく

「心を変えておけばよかったのに」——
が　ひとつの心は　すべてを知り
未来も過去も　いっしょに
もう変わることのない　全(まった)きものとして

「どうだろう　なにかほかのやり方で
価値が　見つけられ
この家をもつ必要が出たら
そのときには　おられないかしら

どのくらい　必要かしら
が　ご利益(りやく)は　増すかしら」
が　その彼でさえ
両手で　授けてくれる

陸や海の幸を
じぶんの時が来れば　わかるし
はぐらかすこともしない
ただロバの頭を　ふりまわして

何を彼はしなければならなかったのか
じぶんで　選んだのではあるが
この世のすべての道のなかで
最悪の道

Ⅷ

それでは　彼らは何を手にするのか
だれがついていくか　目に見えない主人に
ホームの妻や父や母を　おいて
何もない！　だれが契約できるか

何もかも取ってしまう　あの与える人と
が　わたしたち　生きているかぎり　行かねばならぬ
わたしたちは　みずからが　見知らぬ彼の道
語られぬ彼の真理　見えない彼の光

1　現在は、いつも、過去・未来・すべての時の総和である（レインよりの便り、二〇〇〇・四・六）。
2　「ヒュアリーズ」（復讐の女神たち）に対する「慈悲深い女神たち」の意の美称。
3　舞踏会で用いる、顔の上半部をおおう仮面。
4　春分の日以降最初の満月のあとの最初の日曜日。

（第十一詩集『存在』より）